

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1272100221		
法人名	社会福祉法人 旭悠会		
事業所名	グループホーム メタセ		
所在地	千葉県習志野市新栄1-10-2		
自己評価作成日	令和4年10月1日	評価結果市町村受理日	令和4年12月8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/12/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人ヒューマン・ネットワーク		
所在地	千葉県船橋市丸山2-10-15		
訪問調査日	令和4年10月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者の残存能力に合わせた日常生活の支援を目指しています。1人1人のできることに目を向け、掃除や洗濯、調理など職員がサポートしながら皆で行っています。季節を感じて頂けるよう、日々の散歩や四季折々の行事、製作などには特に力を入れています。コロナ禍以前は家族参加型の行事が多く、夕涼みや敬老祝賀会、年末の大掃除・忘年会など、家族と一緒に作りあげてきたグループホームだと常に感じています。現在は感染症予防に努めると共に「今できること」に目を向け、ガラス越しの面会や施設内の行事。家庭的な雰囲気の中、家族と密に連携を図り、安心してグループホームでの生活を過ごして頂けるよう支援を行っています。いつも賑やかで、入居者も職員も皆、笑顔の絶えない明るいメタセです。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

1)一人ひとりが主人公になれるように、適切な声掛けにより、やる気を引き出す支援を目指して取り組んでいる。入居者のこれまでの生活習慣や残存能力を活かしながら、洗濯物たたみ、食器洗い、モップ掛けなどの手伝いにより、生き生きとした表情がみられる。2)コロナ禍でも日々の園内散歩、ホーム内での季節の行事や制作物の作成など季節を感じ五感を刺激し、自立の体力を維持する生活環境づくりに努めている。3)コロナ禍以前は家族参加型の催しを多く実施し、家族との絆を深めてきたことは家族アンケートの回収率の高さにも表れている。4)入居者の平均年齢が93歳とは思えないにぎやかで明るい笑い声が印象的であった。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	スタッフルーム内に事業目的・運営方針・介護理念・介護方針・介護者の心構えを掲示し、共有・実践につなげている。日めくりのカレンダーや部署会議でも随時、理念の確認を行っている。	スタッフルームの目につきやすいところに介護理念とケアの基本方針、介護者の心構えを掲示し、特に「叱らない怒らない、せかせかと仕事しない、忙しい時も笑顔で、残存能力を見極める目を養う」との心構えを大切に理念の実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	園内散歩にてケアハウス入居者やデイサービス利用者とのふれあいを大事にしている。コロナ禍終息後は、以前の様に小中学生の職場体験や、教員実習生の受け入れ、ボランティアも積極的に受け入れたい。	コロナ禍でも、複合施設の利点を生かし、園内散歩でケアハウス入居者やデイサービス利用者との交流を大切にしている。コロナ禍終息後は幼稚園児・小学生・子ども神輿やボランティアの受け入やオレンジカフェ、ラン伴などを通して以前のように近隣との交流を復活させることが期待される。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	キャラバンメイトとして、近隣の事業所や中学校にて、認知症サポーター養成講座を行っている。「東習志野圏域グループホーム連絡会」の再開に向けて活動を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は、コロナ禍以前は入居者を含めグループホームのフロアにて行っていたが、現在は別室で行っている。現状を報告し、助言を頂きサービス向上に努めている。	2か月間の「ご利用者に関する活動内容」と「職員に関する活動内容」を日付付きで詳細に纏めた運営推進会議資料を地域包括支援センターなど関係者に2ヶ月に一度送付し、書面による運営推進会議として、意見や助言をいただけるようにしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には、地域包括センター職員、介護相談員に出席頂いている。介護保険担当者とは事故報告、市の検診等、必要に応じて連絡を取っている。	地域包括支援センターと介護相談員の方には毎回運営推進会議資料を送付し助言をいただくようにしている。介護保険課担当者の方とはコロナ感染防止対策や事故報告など都度緊密な連携が取れている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設内での研修の他に、毎月のリスクマネジメント会議での事故検証。スタッフルーム内に虐待予防チェックシート、コンプライアンスチェックシートを掲示し活用している。緊急やむを得ない身体拘束に関する説明と同意、並びに対策などについても学んでいる。	グループホームリスクマネジメント会議で事故報告の検証と対策と共に虐待予防チェックシート、コンプライアンスチェックシートなども活用し、身体拘束と虐待防止研修を実施している。緊急やむを得ない身体拘束に関する説明と同意並びに対策なども具体的な事例を通して学んでいる。日めくりのマナーカレンダーを作成し、不適切なケアへの意識を高め防止に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内での研修や、オンライン研修で各自学んでいる。又身体拘束に関する資料を部署内に置き、理解している。 2/10		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	施設内での研修や、他部署専門職から資料をもらい、職員間で共有している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には契約書・重要事項を含め、丁寧な説明を行うと共に、ご家族の思いをくみとる事を大事にしている。法律改定時は書面・口頭にてご家族へ十分な説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者には個別で要望や意見を伺い、家族とは密に連携を図り、面会や家族連絡の際に意見や要望を伺っている。年1回のアンケートの実施、毎月担当職員による、手書きでの文書で入居者の様子をお伝えし、年3回のメタセ新聞、毎月のブログは大変好評である。	毎月担当職員による手書きの手紙で入居者の様子を、年3回のメタセ新聞には多くの写真を、また、行事や日常の様子を毎月ブログにアップするなど家族との連携を大切にしており、家族から意見や要望を気楽に言ってもらっている。食事内容が知りたいとの要望から献立表を送付するようにした。コロナ禍で、面会不可→リモート面会→玄関越し面会へと要望に応えるよう工夫している。毎年利用者アンケートも実施している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回開催しているグループホーム会議には、なるべく多くの職員が参加出来る様、シフトを調整している。事前にレジメを配布し、意見交換を行っている。常時職員間のコミュニケーションを密に取り、情報共有を図っている。	毎月のグループホーム会議に全員が参加できるようにシフトを調整し、また、事前にレジメを配布して全員で活発な意見交換ができるよう工夫している。職員アンケートを年2回実施している。スキルアップ計画、評価シートを活用し公平な評価を行うとともに、個々の事情に配慮した働き方の工夫など、働きやすい環境づくりに努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の目標を把握し、必要に応じて面接を行っている。常に働きやすい環境整備や改善に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設として年間計画の中で、研修・勉強会を実施しており、今年度よりオンライン研修を導入している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	キャラバンメイトとしての活動を通し、認知症サポーター養成講座の講師活動、他事業者との情報交換、地域ネットワークを密に展開を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族や担当ケアマネから本人の情報を聞いたうえで、本人とマンツーマンでゆっくり話す機会を多く設け、話しやすい環境・関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約前の面接の際に、家族が困っていた事や今後の不安に思う事を傾聴し、信頼関係が築けるように努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族から話を伺い、訪問診療や訪問歯科、訪問理容等々、その他サービスの説明を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除・洗濯・調理など、家事全般を入居者同士が一緒に行う事で、共同生活という認識、対等な立場を保っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居後も、本人と家族との絆を大切にしている。家族と一緒に本人のケアにあたっているという意識を常に持っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍以前は家族に限らず、お世話になった知人や遠方からの親戚が良く訪ねてきていた。お墓参りや馴染みの店にも出かけていた。現在は地方の親戚との電話の取次ぎや、園内散歩の際には他部署との交流を大切にしている。常に馴染みの関係を継続する支援に努めている。	コロナ禍以前はお世話になった知人や遠方から親戚の方などが良く訪ねてきていた。お墓参りやなじみの店にも出かけていた。コロナ禍の今は、地方の親戚の方との電話の取次ぎや園内散歩時に元利用していたデイサービスやケアハウスの友人や職員との交流をするなど、時に応じた馴染の関係を大切に作る支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の生活の中で利用者同士の関係を把握し、必要に応じて見守り・介入をしている。個々の性格を周知し、我慢や無理強いする事の無いよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	同一敷地内の特養に入所した利用者の家族とは今も交流があり、近況報告や相談を受ける事も多い。コロナ禍前は、認知症カフェや施設イベントを通じての交流を大事にしていた。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人一人の思いや意向について、職員間で常に情報交換を行い、介護記録や申し送りの中で情報交換を密に行っている。	入居前に利用していたデイサービス等での基本情報を基に、ADL、家族情報、排泄、入浴、食事介助などの確認を行っている。入居後の職員との会話の中から、「賑やかに過ごしたい」「散歩を継続したい」「調理や家事の手伝いをしたい」「楽しく暮らしたい」などの入居者からの希望を聞き取っている。また、暫定の施設サービス計画書を家族に送付し、家族の要望や希望を具体的に詳しく書いてもらい、計画のサービス内容等に反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前に家族や担当者から情報を頂いている。本人との日々の会話からも、これまでの生活や馴染みの暮らし方を把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケース記録やミーティング、申し送り等で情報共有し、現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族にはこまめに情報を提供し、相談・意見を頂いている。サービス計画書は個々の介護記録に常にファイリングし、職員がプランを意識してケアにあたるように指導している。毎月のグループホーム会議でサービス担当者会議を行い、多くの意見があがりケアプランに反映している。	入居者、家族の意向や希望にそって、健康面と暮らし方に焦点を絞った施設サービス計画書を作成している。健康につながる散歩での筋力の維持や美味しい食事の提供、また、楽しみにつながるレクリエーションへの参加、他の入居者との触れ合いなどを、短期目標、サービス内容に反映させている。毎月のグループホーム会議では、不穏な言動の際の関わり方や排泄・入浴時の介助法についての個別カンファレンスを行い、実施状況、達成度、変化の要因等についてのモニタリングにより計画を見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録に日々の暮らしや気づきを記入し、朝礼や口頭での申し送りを毎日行い、情報の共有をしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者が発する様々なニーズに、職員1人1人が柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	家族から情報を聞き、個人に合った地域資源を活用出来る様支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	現在は訪問診療、訪問歯科を導入し、多くの利用者が利用している。又、本人や家族の希望するかかりつけ医・医療機関に家族の付き添いで受診している方もおり、その際には本人の状況を書面で伝えたり、家族の要望で受診に同行する事もある。	ほとんどの入居者が内科医による訪問診療を利用している。受診時には副主任が同席し、気になる健康状態などを医師に伝え、指示事項や薬の変更などの受診内容は申し送りノート、業務日誌等に記録し、職員間の情報共有を徹底している。また、家族には「訪問診療報告書」を毎月送付し、情報共有を図り信頼関係を築いている。精神科・皮膚科などの家族同行の受診の際には、入居者の健康状態や気になる点、相談事項などの書面を用意し、持参することにより円滑な受診につなげている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎日、担当の看護師により健康チェックの確認を行っており、体調不良時には相談しアドバイスももらっている。訪問診療を利用されている方は、24時間オンコールでいつでも、看護師に相談する事が出来る。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には、メディカルソーシャルワーカーと連携を図り、情報共有を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に終身の施設でない事を説明し、併設の特養(従来・ユニット)への申し込みの案内を行っている。各部署相談員とは日頃から密に情報共有を図り、必要であれば、他施設との連携を図り柔軟に対応している。	入居時に、ホームで出来ること出来ないことについての「重度化対応指針」を家族、入居者に説明し同意を得ている。医療機関との連携や24時間オンコール体制などについても説明し、重度化した場合でも「その人らしい」生活を送れるように、次の生活基盤の確保のための医療機関や他の老人介護施設、法人内の施設への移動について、入居者、家族の立場に立って助言や紹介を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急対応の研修への参加、部署独自で緊急時のシュミレーションを行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	例年、災害を想定した訓練は年4回想定しているが、コロナ禍で大規模な訓練は現状行えていない。通常訓練には地域の方も参加して頂き、協力体制を築けている。災害用の持ち出し品も常備しており、施設内での連携体制も整えている。マニュアルを整備し、会議等で確認を行っている。 6/10	コロナ禍で入居者による避難訓練は実施できていないが、自衛消防活動や消火器の操作等についての消防訓練の研修を実施している。厨房はIH対応であるが、ホーム内のコンセントによる漏電防止のための毎日の点検を徹底している。スプリンクラーの操作法や避難経路など、災害時に想定される手順書を事務室に掲示して職員が混乱しないように工夫している。緊急時用の個人ファイルは常時、一括して袋に入れ、災害時の備品と一緒にリュックでいつでも持ち出せるよう工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の大先輩である利用者に敬意をはらい、尊厳やプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。職員間ではお互いの言動を指摘し合い、マナー向上プロジェクト委員と共に、意識向上につなげている。	一人ひとりが主人公になれるように、適切な声掛けにより、やる気を引きだす支援を目指して取り組んでいる。入居者のこれまでの生活習慣や残存能力を活かしながら、洗濯物たたみ、食器洗い、モップ掛けなどの手伝いにより、生き生きとした表情がみられる。また、体操やレクリエーションへの参加は強制せずに、体調や気分に合わせて居室で一人の時間を過ごせるように配慮している。「わかりやすい言葉で話しかけよう」などのメッセージが書かれた日めくりカレンダーを掲示し、職員の理解を深めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で数多くの選択肢を提供し、本人が自己決定が出来る様、支援を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事以外は、本人のペースで過ごして頂き、希望にそった個別支援を行っている。入浴の時間や、レクリエーションの参加、散歩や就寝前の過ごし方等、なるべく希望にそった対応をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	一部の利用者はその日に着る服を自分で選んでおり、職員と一緒に選ぶ方もいる。訪問理容では、自分の好みの髪型にカットしておしゃれを楽しんでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	年間で期間を決め、週に1度昼食の献立・調理を利用者で行っている。普段の食事でも、日常的に調理を行い、季節ごとの行事におせち料理、母の日御膳、敬老御膳を厨房から頂いている。定期的にコンビニスイーツの提供やお菓子作りを行い、食事を楽しみ機会を多くもうけている。	嗅覚、味覚、視覚などの五感を刺激するケアを大切にし、おいしい料理の提供に力を入れている。ほとんどの入居者が能力に合わせて、調理から配膳、下膳までの一連の食事に関わっている。また、敬老祝賀会や母の日の特別膳を味わったり、バレンタインデーの菓子作りや毎年恒例の梅ジュース作りなど、季節感を味わいながら食への関心を高める取り組みがみられる。咀嚼・嚥下機能を考慮し、管理栄養士によるキザミ食などの食形態の変更や訪問歯科による口腔ケアにより、美味しく食べられるように支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士の献立による食事を、併設の厨房より提供し、個別に合った形態や食事量を提供している。歯科衛生士からも助言を頂き、柔軟に対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	訪問歯科の無料健診を受け、申し込み者は歯科衛生士、又は歯科医師の口腔ケアを実施している。月に1度口腔ケア指導を受け、口腔ケア・マネジメント計画書を担当者が作成。それに基づいた毎食後の口腔ケアを実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、定期的なトイレ誘導の声掛けや介助を行っている。ほぼ全員が紙パンツを使用しており、本人の状況に合わせて夜間と日中でのパットの使い分けをしている。	リハパンとパットの使い分けにより、トイレでの排泄に力を入れて取り組んでいる。定時誘導や不自然な動き、表情が見られた際には、他の入居者に気づかれないように、羞恥心に配慮してさりげないトイレ誘導を行っている。車椅子対応のトイレにはつかまりやすい位置に手すりが設置され、安全に落ち着いて使用できる環境にある。また、健康管理表を活用し、個々の排泄パターンを把握するとともに、便の量・性状を具体的に記録して、訪問医の指示の下剤も使用し、適切な排便につなげている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	散歩や運動、水分摂取にて、なるべく自然な排便が出来る様支援しているが、排便を記録し困難な場合は主治医と相談し、下剤等の処方・調整を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2～3回の個浴。なるべく本人のタイミングに合わせて声掛けをし、気持ち良く入浴して頂ける様支援している。季節ごとに菖蒲湯やゆず湯、ローズマリーのアロマ浴を楽しんで頂いている。	午前中を原則に週3回の入浴を楽しみ、希望に合わせて午後入浴も用意し、健康管理表で入浴の頻度を記録している。季節毎に菖蒲湯や柚子湯を提供し、夏場はシャワー浴や足浴などの個別対応を行っている。浴室と脱衣所との温度差を無くし、3方向からの介助可能な浴槽に、車椅子使用の入居者も補助椅子利用により安全に浴槽に入っている。個浴でゆっくりした気分で入浴を楽しみ、職員と思い出話やなつかしい歌を一緒に歌うなど楽しい時間を過ごしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	フロアや居室で各自過ごされ、安心して就寝して頂ける様支援している。不安や寂しさを口にされる方にはお気持ちに寄り添い傾聴し、個々の状況に応じて対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は処方箋の内容を確認し、把握している。誤薬には細心の注意を払い、2人以上の職員でトリプルチェックを行っている。体調に変化があればケース記録に記入し、家族・主治医に報告を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の得意分野を把握し、楽しく役割分担が出来る様に支援している。出前やコンビニスイーツを注文する際には、メニューを事前に用意し1人1人お好きな物を選んで頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日頃から園内散歩に出かけ季節を感じて頂くと共に、ケアハウス入居者やデイサービス利用者とのふれあいも楽しんでいる。猛暑や肌寒い日は玄関ポーチのベンチに座り気分転換を図っている。集団検診の外出の際には、車内からの景色を楽しんでいた。	コロナ禍でも園内散歩を楽しみ、これまで利用していたデイサービスの顔なじみの方との挨拶や会話を楽しんでいる。家族と一緒に医療機関への受診外出や集団検診の機会を利用しての近隣ドライブで気分転換を図っている。これまでは、サクラ見物、バラ園への季節毎の外出行事や和食レストランでの外食を楽しんでいたが、コロナ禍で中止となっている。それに代わる行事として、室内での輪投げやボーリングなどの運動会を実施し、また、ケーキ作りなどで少しでも雰囲気を楽しむように工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的に金銭管理は施設で行っているが、個別に小遣い程度のお金を所持している方もいる。コロナ禍以前は買い物の際、自分で欲しい物を選んで頂いていた。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの電話をつないで会話して頂いている。毎年家族には年賀状を出しており、友人・親戚から葉書を頂く事もあるが、返事は出せていない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には手作りのロバ隊長がおり、面会に来られる家族には、日々の生活の写真をレイアウトした物を見て頂いている。フロアや居室扉には、入居者と一緒に製作した作品を飾り、季節を感じて頂ける様工夫している。	共有空間は常に入居者と一緒につけていくこと、また、季節感を味わえる雰囲気づくりを目指して取り組んでいる。七夕の短冊や書道、切り絵などの制作物がフロア、廊下、玄関に飾られ、入居者の思い出や達成感を味わえるようにしている。また、入居者の笑顔あふれるスナップ写真や制作物が玄関に飾られ家族を迎えている。入居者同士が会話を楽しめるように、相性や介助度を考慮して、定期的にテーブル席の変更を行っている。洗濯物のたたみを手伝い、調理にも参加し、モップ掛けなどの掃除を職員と一緒にするなど、明るい声がフロアに飛び交っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室やフロアで利用者同士会話を楽しまれる方や、ご自分のペースで居室で過ごされる方もおり、思い思いに過ごして頂いている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には自宅で使用していた馴染みのある家具や(仏壇や嫁入り道具の鏡台等)本人の思い出の品や写真を飾られている方もおり、居心地のいい環境作りをしている。	居室の扉には、書道が得意な入居者が書いた名前と手作りの飾りが掲示され、入居者は混乱せずに居室を利用している。入居時には新調品ではなく、これまで使い慣れた馴染みの鏡台などの家具や家族の写真などを持ち込んでもらうように家族に依頼している。また、介護ベッドを導入し、不自然な動きをキャッチし、居室内での立ち上がり時の転倒防止を図っている。居室担当者は、居室内の温度調整、換気に注意を払い、タンス内の衣服の整理整頓を行い、清潔感のある空間づくりに努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内部はバリアフリーになっており、安全に生活出来る様になっている。場所を示すプレート等を取り付け、混乱せず生活して頂ける様工夫している。		

目標達成計画

作成日: 令和4年10月25日

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1		新型コロナウイルス感染症対策に努めている中、今年度8月にグループホームでクラスターが発生してしまう。	感染予防を徹底すると共に、感染者が出た際の迅速かつ的確な対応が必要。	今回の経緯を踏まえ、反省点を活かす具体的な取り組みを施設全体で行う。対策会議の継続実施、マニュアル作成。	2ヶ月
2		利用者の高齢化に伴い、認知症の進行やADLの低下がみられ、以前に比べ介護度が上がり介助が必要な方が増えている現状である。皆で同じ事(家事やレクリエーション等)を行うのは難しい事もあり、個別ケアの重要性を感じている。	個別支援を念頭に、個々の能力にあった支援を行う。	1人1人の「できること」に目を向け、個々の能力にあった家事やレクリエーションを提供する。年齢や体力を考慮し、こまめに休息して頂く事もある。逆に活動的に過ごせる方に対しては、個別に散歩に出かけたりと臨機応変に対応する。	6ヶ月
3					ヶ月
4					ヶ月
5					ヶ月

注) 項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入して下さい。